

書道アートをめぐって（その7）

”Trans-disciplinary”

横山 豊蘭 YOKOYAMA Houran

（美術学部）

西洋のリベラルアーツ

名古屋芸術大学では2017年度より、芸術教養領域リベラルアーツコースが設立された。西洋中世の大学制度における「リベラルアーツ」(liberal arts)は、5世紀頃の「自由七科」(Martianus Minneus Felix Capella)に由来する。具体的には文法、修辞学、論理学、算術、幾何、天文学、音楽の七つの学科がその内容である。古代ギリシアにおいて、人が自由(リベラル)であるために学ぶべきもろもろの技芸(アーツ)であり、人間を種々の拘束や強制から解放して自由にするための知識や技能を指す言葉であるとされている。

東洋の六芸

東洋でも学問領域の形成がなかったわけではない。古代中国における「六芸」である。古代中国で卿(士大夫、貴族階級)が学ぶべきものとされ、周代に定型化した「六芸」は、礼、楽、射(弓術)、御(馬術)、書、数の六つ。書はこの中の1つとして含まれている。これは東洋においてはリベラルアーツの自由七科に相当する。日本の「藝術」は明治時代、啓蒙家の西周によってリベラルアーツから訳された造語であるが、アーツ(芸術)の「芸」という言葉ひとつとっても、現在の「芸」とは意味合いが違う。

学際的研究

異なった学問領域の研究者が関わる事で、これまでの研究とは異なった観点、発想、手法、技術などが共有され、新たな成果を生み出す事がある。従来あまり結びつかつかなかった複数の学問分野にわたって精通している研究者や、複数の学問分野の専門家などが共同で研究に当たることによって、新たな学問分野を形成する可能性がある研究を、学際的研究(Inter disciplinary)という。赤司秀明の1997年の著書『学際研究入門—超情報化時代のキーワード』によれば、その発展段階として、複数の学問体系が共同で研究を行うマルチディシプリナリー(Multi-disciplinary)、複数の学問体系の共同作業により、新たな知を共有するインターディシプリナリー(Inter-disciplinary)、複数の学問体系に及ぶ新しい専門分野が生じるクロスディシプリナリー(Cross-disciplinary)、既存の学問体系の枠組みが崩れ、新しい学問体系が生じるトランスディシプリナリー(Trans-disciplinary)と分類し、現在、日本において(Trans-disciplinary)は最先端の学問分野と規定している。しかし、学際的研究は現在の日本において、必ずしも環境が整っているとは言えないと考えられており、その理由として研究システムなどの様々な問題が指摘される。そもそも、複数の分野にまたがる研究者による学際研究チーム体制の構築が、現在の日本では困難であるという現状がある。九州大学大学院比較社会文化研究院、太田好信教授は『比文創立十周年・記念文集(2004年刊) 92-101頁「学際性とは何か」の中で、

学際性とは、反復される越境行為そのものといえる。(中略)

つまり、対象との関係ではなく、学問の境界を越えようとする意志から生まれ、それが新たな研究対象をつくりだしたのである。(下線、横山)

70年代中頃の日本においては、文化人類学者である山口昌男が、記号論を中心とした「人文系学問の再編成」を主張し始め、アメリカでは、文化人類学者クリフォード・ギアツが、73年『文化の解釈』によって、それを象徴的に体現していた。

文学研究者、石井洋二郎教授は「グローバル化時代のリベラルアーツ」（東京大学教養学部報561号）の中で、

本当の意味でのグローバル人材は、世界をモノクロームに塗りつぶしてしまいかねない均質化の圧力に屈することなく、絶えず異なる価値観を体内に取り込みながら成長する柔軟な「リベラルアーツ精神」をそなえていなければならない。逆説的な言い方になるが、グローバル化の負の側面をも深く認識し、毅然として世界の多様性を擁護するアンチ・グローバルな感性の持ち主こそが、真のグローバル人材になりうると言ってもいいだろう。

（下線、横山）

学際的研究と越境への意思

学際研究チーム体制の構築が現在の日本では困難であるという、しかし、その困難さが本質的に表しているのは、私達が抱えるもっと根源的な問題、すなわち他者（他分野、異世界）との関わり、未知なる他者との「関わり方」の問題に他ならない。私達は何かを信じ、そして時には疑念を持つ。何かを信じる事は同時に盲目的であり、契約という制度は本来、疑念から生まれる。現代ではあたり前の事だ。しかし、私達が他者（異世界）と関わる際に必要なのは、未知の世界、未知なる他者の心の世界へとダイブし、絶えず異なる価値観を体内に取り込みながら成長する柔軟な精神であり、反復される越境行為そのものなのだ。

書の自由（リベラル）と学際性

書、つまり文字が作られるプロセスは本来、学際的（Trans-disciplinary）であると私は考えている。「書く」（記述する）という行為は、どの分野でも共通するものであるし、同時に「書」の研究は学際的である必要があるという意味でもある。異なる文化の言語を越え、他者と会話する自由（技芸）がリベラルアーツの目的の1つであるならば、文化人類学的に、時空を超えて書かれた書（書法）を「読む」事もリベラルアーツの目的の一つだ。

書は「学問体系の枠組みができる以前」（枠組みが無い）からあるプリミティブな（学際的な）体系であり、さらに言えば書は（文字や書法も含め）、様々な領域の要素（膨大な知識、教養）が入り混じった学際的風土（ある種の混沌）から生まれた体系そのものである。つまり現在、使っている（今、あなたが読んでいる）一つ一つの「文字」は膨大な多様性の中から淘汰された「生き残り」なのだ。東洋においては書文化の学際性が、その後の新たな学問体系を産み出す事に貢献してきた。現在では、インターネットを介したグローバルネットワークとビッグデータ（膨大な情報）による「AI」が、テクノロジーによって「学際的」に産み出されようとしている。

現代も書は学際的であり、同時に混沌としている。日本の「書道」は中国の書からさらに進出し、プリミティブであり続けると同時に、西洋人にとっても、常に最先端なアート「境界領域」、グローバルでありながら、アンチ・グローバルな感性なのである。

少なからずこれまでの大学における研究において、私たちが「学問体系」とするところの体系、それがいわば西洋からの「輸入」された体系であり、研究者の思考回路（考え方）そのものが「分離」「細分化」の方向性をもつ傾向にあるのは明らかだ。しかし、我々はまだ一度「書道」について考える機会が必要だ。これは既存の書道の概念にとどまらず、西洋（リベラルアーツ）

も東洋（六芸）も超えた学際的なものでなければならない。それはまさに、毛筆によって書かれ、点と点、線と線を繋げる書的な思考法であると言えるのではないだろうか。

横山 豊 蘭

（書道アート1、2 / アートコレクティブ / アートプロジェクト1担当、非常勤講師）

○「第71回赤い羽根協賛児童生徒作品コンクール」書道部門一次審査

会場 名古屋芸術大学西キャンパス G207

会期 2019年9月9日13:00～ 審査員 横山豊蘭

○御前崎港「パシフィックビーナス」寄港歓迎イベント「横山豊蘭書道パフォーマンス」

会期 2019年8月20日16時30分～

寄港歓迎イベントでのラジオ出演、静岡ラジオ放送（K-mix）「モーニングラジラ」出演
2019年8月20日10時40分～

○「第2回清流の国ぎふ芸術祭ぎふ美術展」

企画委員を努めさせて頂いている「清流の国ぎふ芸術祭ぎふ美術展」の第2回展が、2019年8月17日（土）～9月1日（日）まで、岐阜県多治見市にある、セラミックパークMINOで開催された。主に書部門、自由表現部門の審査員を推薦させて頂いた。

会期 2019年8月17日（土）～9月1日（日）

会場 セラミックパークMINO（多治見市東町4-2-5）

部門 日本画、洋画、彫刻、工芸、書、写真、自由表現。

会場来場者数 12,389人

審査員推薦 書部門 高木聖雨（書家／大東文化大学教授）

島谷弘幸（九州国立博物館長）

自由表現部門 榎木野衣（美術批評家／多摩美術大学教授）（敬称略）

○静岡ラジオ放送（K-mix）ラジオ番組【ミュージック～Music The Great Deep～】

出演2019年4月27日6:30～7:00放送

出演、梅田英春（静岡文化芸術大学教授）、バグース長谷川（ラジオDJ）

ゲスト出演、横山豊蘭（名古屋芸術大学「書道アート」講師）



○名古屋テレビ（メーテレ）書道アート取材 2019年4月24日16時30分（生中継）
番組名：「アップ」 書道パフォーマンス「令和」
出演：横山豊蘭、及び「書道アート」受講生、交換留学生、書道アート部、参加。



○名古屋芸術大学「ア」ーッ！ラジオ2019」10TH ～HEY!!SAY!!～
 2019年2月16日～3月3日（名古屋芸術大学アート&デザインセンター）
 特別ゲスト 荒木裕子、佐藤健寿、片桐邦雄、バグース長谷川 ほか。（敬称略）
 企画サポート、フライヤー・メインビジュアルアートディレクション。

